

---

# Full Moon

雨月 照瑟

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F u l l M o o n

### 【Nコード】

N 8 5 2 0 C

### 【作者名】

雨月 照琵琶

### 【あらすじ】

世界のために……。心優しい少女・ルチアはそう願い、旅に出る……。たとえその先にどんな未来がまっていようと。世界のため、愛する人のためルチアはみんなの幸せを祈った……

## No.1

青白く月が輝いている

少女の美しいプラチナブロンドの髪が風に揺れている、月明かりのせいか顔色が悪い

黒いビロードのような髪を持った少年が少女を抱き寄せる

「絶対に俺が取り戻してみせるから・・・」

耳元でつぶやいた声は少女には聞こえない・・・

なぜ人は憎しみあい傷つき、それでも愛すのでしょうか・・・

「アイル！起きて！」

少女はすこし癖っ毛のプラチナブロンドの長い髪をゆらしながら黒い髪の少年を起こそうとしている

「ル・・・チア？今日は休みだろ？もう少し・・・」

ルチアと呼ばれた少女は泣きそうになる

「え？ダメだよう・・・。ちゃんと起きてえ・・・」

アイル・エール・フェンデは実は起きていてからかっている

「アイルう・・・きやつ」

アイルはルチア・フォン・エルウッドをベッドへ腕をひきよせ倒した彼女の頬にふれる

「そんなに起きてほしい？」

「うん・・・、だって今日は大司教様とお約束があるもの・・・」

ふつとアイルは意地悪っぽく笑い、ルチアを抱き寄せた  
「アイル？」

「じゃあ、お目覚めのキスしてくれよ。お前のファーストキスをさ・  
・・」

ルチアは顔を赤らめ、瞳を潤ませた

「アイルの意地悪！ぐすつ・・・ひどい・・・」

「あははは、ごめんごめん冗談冗談・・・」

アイルはふつと笑った

このとき俺はいつまでもこんな日々が続くと思っていた・・・、  
ずつとルチアがそばにいてくれると・・・

「あつ遊んでる場合じゃないよ！早く起きてしたくして！」

アイルは起き上がり頭を掻く

「はいはい・・・、ルチア」

ルチアは部屋を出て行こうとした足を止め振り返った

「なあに？」

「おはよう」

ルチアは微笑んだ

「おはようっ、アイル」

教会へと行くとすでに大司教と数人の司祭が待っている

「遅くなってしまつてごめんなさい」

ルチアは深く礼をする

「ルチア、いいんですよ。他の仕事があつただけですから・・・。  
それよりもあの話引き受けてくれますね？」

「あ、はい。それが世界の平和のためになるのなら・・・」

「では、私は儀式の準備があるので」

ルチアとアイルは教会からでた

この世界にはある風習があった。  
それは、一人の少女が世界の悪を浄化するために旅に出、そして女神と契約し世界を浄化するのである

胡散臭いけどな

アイルはため息をつきルチアを見る

この世界には三つの人種がある  
一つはルチアのように人間・・・

二つ目はアイルのような獣人・・・こちらは体に特徴があり瞳が深い紫の色で、自分の意思で獣に変身することができる。アイルの場合は普通の狼の数倍はある黒い狼だ

そして・・・、三つ目は天人・・・女神をはじめとする天使などのことをさした

どの人種も魔法を使うことができ、その力は誕生するときに与えられた

ルチアは風、水、癒しの力、そして光の力

アイルは火、雷、大地の力、そしてルチアとは対称的な闇の力の少ない・・・悪く言えば才能のない人もいる

ルチアとアイルのようにつかさどる力の多い人は世界から大切にされた

「ルチア・・・、本当に行くのか？」

「うん、それが世界のためになるのならね・・・」

「なあ、俺もついていっていいか？やっぱ心配だし・・・」

ルチアは笑顔で振り向いた

「本当？！ありがとう！」

アイルに抱きつく

「ルチア？今日こそ俺の気持ち聞いてくれるよな？」

顔を胸にうずめながらルチアは頬を赤らめる

「う・・・ん」

気付いてるかも知れない思いを改めて伝えるって変だな・・・

「好きだ・・・」

「うん、私も・・・」

アイルはそのままルチアのお腹を優しく持ち上げキスをした

このときが止まればいいのに・・・

アイルはそう願った・・・

## No.2

雲ひとつない春の晴れた空、満開になった美しい白い花が儀式を飾るようだった

教会では女神像の前でルチアが祈りをささげている

「私は、女神の代わりとなって世界を旅し、世を浄化し平和にする  
と誓います・・・」

誓いの言葉を言い終わると、彼女の周りを光が包み胸元に印が一瞬  
ひかる

「では、これから。そのたびへ出てもらう・・・。アイル！」

アイルは前に出る

「はい・・・」

「そして、レイ！」

深い緑色の髪と瞳を持った少年。レイ・ロト・ルルスが前に出でる  
「はい」

「ともに同行し巫女を出助け給え」

儀式が終わり3人は外に出た

「えっと、アイル、レイこれからよろしくね」

ルチアは微笑んだ。

レイは教会と学園が推薦した少年だ。

レイは短い髪を揺らし笑う

「よろしく！」

レイのつかさどる力は三つ・・・、才能のあるほうだ

「アイルもあいさつして・・・」

アイルはぶっきらぼうにレイと握手をする

「よろしく・・・」

多くの人々に声援をもらいながら、街を出た

「確か、全部で四つの神殿で祈りをささげるんだっただよな？」

アイルがルチアにたずねる、ルチアはうなずく

「そうだよ、そして一番最後に女神様が眠っているって言う神殿で契約するの」

レイが感心した

「へえ、ちゃんと勉強したんだあ。えらいなあ」

「行くと決めていたのだからそれくらい当たり前さ・・・」

アイルはムツとした様子で答えた。そんな二人をみてルチアはおろおろしている

「け、けんかはだめだよ？これから長い間一緒に旅するんだから仲良くしよう？」

アイルとレイは前からあんまり仲が良くない

だから反対したのに・・・。大司教様のバカ・・・

数日前、ルチアは大司教に呼ばれていた

「何のようですか？」

大司教は振り向いた

「ああ、よく来てくれましたね」

「いえ、別に平気ですけど・・・」

「実は、旅に出るメンバーのことで話しがあつて・・・」

ルチアは首を傾げる

「メンバー・・・ですか？」

ええと大司教はうなづく

「アイルの腕を信用していないわけではありませんが、護衛が一人では心配だと思って・・・」

「なあんだ、そんなことですか」

それで大司教は言いかけ口を閉じる

「大司教様？」

「アイルとあまり仲が良くないのは知っているんだが・・・、力が使えるのがそいつしかいないのですよ・・・」

ルチアは驚きとも呆れとも複雑な表情をした

「まさかレイですか？」



『そいつしか適任なのがいなくて・・・』

『え！？そんなぁ、私一人であの二人はまとめられません！大司教様もよくご存知でしょう？』

大司教様と部屋の外から呼ばれる声がした

『ま、まあ・・・、私はこれで、仕事があるんでね・・・』

『ちよつ・・・、大司教様！』

ルチアはもう一度二人を見てため息をついた

「ルチア？どうした？」

いつの間にかアイルの顔が目の前にあつた

「え？・・・あ、ううん。なんでもないよ！」

「そっか、疲れたりしたら何時でもいえよ」

「そうそう、疲れたたら何時でも俺が抱きかかえてやるぜ」

にっこりとアイルはルチアに向かって微笑み、レイを睨みつける

「ありがとう。二人とも」

いつか、二人が笑いあえるような仲になればいいのに・・・

ルチアの思いは春の心地よい風に流された

## No.3

「ねえ・・・、レイ？」

レイがルチアのほうに振り返る

「なあに？ルチア・・・」

ルチアは立ち止まり周りを見渡す

「本当にこっちであつてるの？」

生い茂った木、白昼だというのに夜のような闇、野鳥の鳴き声  
半日も歩いたというのに目的の街まで着かない

「予定だったらもうついてるはずなんだけど・・・」

「・・・、いつの間にかに道から外れちゃってた、ごめんね。  
へっ」

ルチアとアイルは卒倒しそうになった。アイルが口を開く

「お・・・まえが、行った事あるまかしとけて言ったから・・・」

「うーん、獣道すらなくなっちゃったねえ」

アイルは頭を抱え込む

「あ、ねえ。地図貸して？」

レイはルチアに地図を渡した。ルチアはそれを受け取る

「ふう、コンパスも使えないし・・・。だいぶ道から外れちゃって  
るみたい」

「そんなのんきに言ってる場合じゃないだろ！」

につこりと笑い、地図を地面におく

「大丈夫だよ？」

ルチアはゆっくりと目を閉じる

「風よ・・・、我が意思に答え道をしめしたまえ・・・」

ふわりと風が巻き起こり道を示した

「こっちみたい」

風が示したとおりに歩くと街道へ出た、すっかり日はくれている  
「これ以上進むのは危険だろう。今日はここで野宿だな」

アイルは荷物をおき、薪を集め始めた

「レイ、お前もだよ……。つたく……」

「わ、私は？」

「お前は休んでろ……。体が丈夫というわけじゃないんだから」

ルチアは俯いたが、すぐに顔を上げ笑顔を作った

「そうだね……。心配してくれてありがとう！でも……」

「でも？」

「少しお散歩してていい？すぐ戻ってくるから」

だめだと言おうとしたアイルをレイがとめた

「いい。行つてきなよ」

「ありがとう！」

ルチアは去っていった

「おい！だめにきまつてるだろ！」

レイの胸ぐらをつかんだ

「ルチアは知らないだろうけど、大司教からあの話は聞いてるんだろう？」

あの話しと聞いてアイルはハツとして力を緩めた

「そのうち、あんなかわいいわがままも聞けなくなるんだから……」

「

「そうだな……。わりい……」

しばらくの間二人はルチアが戻ってくるまで黙ってしまった

「ただいま！むこうに川があったよ。あっちに移動しない？」

ルチアが川のほうを指で示す、最初にレイが口を開いた

「それもそうだな。お手柄だぞ！ルチア！」

レイはニツと笑い親指をたてた

「なっ？アイル。行こうぜ」

「あ……。ああ、そうだな」

アイルの様子をみてルチアは不信を感じる

「アイル？どうしたの？けんかでもした？」

「え？あ……。なんでもないよ……」

「ふうん」

「ほら！二人とも行こうぜ！」

夕食を食べ、一息ついた

「あ、ねえ。誰も見ないように見張っててくれる？」

「「なんで？」」

きれいに二人から返答が帰ってきた

「え？水浴びしたいなあと思って・・・」

「見ない、見張ってるからいいよ」

「ありがとう！アイル」

ぱしゃつと水に入る音がする

「気持ちいい。髪の毛、ほこりだらけだ」

茂みから物音がした、とつさに前をかくす

「？」

「明かりがあるからまたカモがいるかと思いきや。もつといいもん  
がいたなあ」

へへ・・・と笑いながら、野党の男たちが寄ってくる

逃げようとしたときにはもう、囲まれていくちをふさがれ取り押  
さえられた

「んんっ」

「いい体だなあ・・・」

男がルチアの胸に触れようとしたときだった

「おい、汚い手でルチアに触れるな・・・」

男ののどもとにやった剣は電気を放っている、そしてうしろからは  
レイが弓をひいている

男たちはしたうちをして去っていった

「アイル・・・レイ・・・、ありがとう」

アイルはそっぽを向いている

「とりあえずなんか着てくれ・・・」

「あ・・・」

ルチアは顔を真っ赤にした

「魔物じゃなくて良かった・・・」  
ほっとアイルは息をついた

「あいつら、あきらめてくれたかな・・・」  
レイがポツリとつぶやく

「さあ、どーだか」

「ま、次は容赦しないでいいよな？」

「もちろん。」

ルチアは二人のやり取りを黙って聞いている

「なんか、ごめん・・・。迷惑かけて・・・」

「あいつら・・・。俺たちをバカにしゃがってゆるさねえ」

くるりと盗賊の集まりのほうに、振り向く

「いくぞー！」

「おー！」

## No.4

「ごめんなさい・・・」

ルチアはさつきから謝ってばかりだ、アイルがため息をつく

「だから、もういいって・・・。ルチアが悪いわけではないんだから・・・」

「でも・・・。私が勝手な行動をしたから・・・」

レイはルチアの頭をやさしくなでる

「いいじゃん、ケガがなかったんだからさ」

「レイ・・・。ありがとう」

アイルは一人考え込む

「よし、やっぱりここで休むのは危険だ・・・。徹夜になるけどルチアが歩けるなら移動しよう」

そう言つてルチアの顔を見る

「歩けるか？がんばって徹夜で歩いてゆっくり宿で休みたいだろ？」

「うん、私は平気・・・。レイは？」

「おれはへーつき」

「そうと決まれば早く行こう・・・」

ルチアたちが野宿しようとしていたところはそんなに町からはなれていなかったみたいで店などが閉まる前に余裕でついた

町の様子を見に行っていたアイルが戻ってきた

「宿は一軒しかなくて、その宿も一部屋しかあいてないらしい。どうする？」

レイが口を開いた

「どうするって・・・。せつかく来たんだから」

「そうだな・・・。じゃあ行こう・・・」

宿に入り二階の部屋に案内された。一階では酔っ払いが騒いでいる、アイルとレイがほぼ同時にため息をつく

「どうしたの？」

「これじゃあ、ゆつくり休めないと思つて・・・」

ルチアは壁にかけてある時計を見る。針は9時半を指している  
「まだ、10時前だよ。しょうがないよ・・・。」

「それもそうだな・・・」

「あ、俺散歩に行きたい」

アイルはレイを思いつきりにらみつけた

「お前一人にするとどこへ行くか解らないからおれも行く」

「アイル君あつたまいい、レイそんけーしちゃあう」

抱きつこうとしたレイをアイルは殴る

「寝言は寝てから言え・・・。お前は寝ても言うな・・・」

アイルつてキレたら怖そう・・・

ルチアはそう思いながら二人のやり取りをみている

「じゃあ、行つてくるよ・・・。ぜつつつつつたいにここを離れるなよ！」

「う・・・うん、解つてるつて。レイと一緒にしないで」

二人が出て行つてしばらくすると扉を叩くおとがした

もう帰つてきたのかな？

「はい」

扉を開けるとそこには大きな花束を持った青年が立っていた

「あの、これはいつたい・・・」

「サービスなんです。女性限定のね」

そう言うとき青年は花束の中に隠していたナイフを突きつけた

「きゃっ」

「静かにしな・・・、ケガをしたくなかったら俺についてくるんだ」

「い、嫌だと言つたら？」

青年はニヤリと笑う

「そのときは大事なお友達にさよならしなきゃな・・・」

「わかつたわ・・・。ついていきます」

月の明かりに包まれた幻想的な町は恋人たちがたくさんいる

「ここは恋人たちの町って呼ばれているんだ・・・」

青年はルチアの腰に手を回し、顔を覗きこむ

「ふうん……。あいつらにくれてやるのはもったいないな……」  
「あいつら……?」

「そ、俺に君を連れてくるように命じたばかりだも」

ルチアは首を傾げる、そのしぐさに青年は今は亡き恋人の面影を思い出す

「……、君はそっくりだ……」

「誰にですか?」

「ん? なんでもない。お友達に見つからないうちに早く行かなきゃ……」

町から少し離れた森の中に見つけにくい洞窟があった

「おお、クラウス……。獲物は?」

「ちゃんと無傷で連れてきたよ」

「よしつ、じゃあその女をボスのところへ連れて行け」

「了解……」

洞窟に入ると明かりで照らされている、おそらくそこにボスがいるのである場所とは違う、部屋へ連れて行く

「クラウスさん? あっちじゃないんですか?」

クラウスはルチアをいすへ座らせる

「ボスのところへ行ったら君はひどいことをされると思うよ……」

「

「でもそれがあなたの仕事じゃないんですか?」

ふうとクラウスはため息をつく

「さっき言っただけ? もったいないって……」

「それだけで?」

「違う……。俺がこの世で一番愛した人に似ていたから」

「私が……?」

「うん、ここのボスにむごい殺され方で殺されたね……」

ルチアは目を見開く、クラウスはさみしそうにふつと微笑んだ

「君はいくつ力を使える?」



「四つですけど……。まさか敵討ちをするつもりですか？」

クラウスはうなずいた

「そうだよ……。そのために君を連れてきた。協力してくれないかな？終わったら君はちゃんとあの二人のもとへ無傷でかえす」

「……。いいですよ。協力します」

「ありがとう……。君は優しいんだね。あ、そうだ名前教えてよ」  
「ルチア・フォン・エルウッドです……」

クラウスは目を見開き、エルウッドと小さく反復した

「ご存知ですか？」

「どつりで似てるわけだ……。フラルっていう女性は君のお姉さんだろう」

ルチアは優しくった姉・フラルを思い出す

『ルチア、好きな人ができたの……。クラウスって言ってねとつても優しい人なのよ』

「あ……。クラウス……。まさかあなたの恋人って……」

「そうだよ、フラル・フォン・エルウッド。ごめん……。守れなくてあんなむごい死に方をさせてしまった……」

ルチアの頬を一筋、涙が流れる……

「いいんです……。かわりにお礼を言いたいぐらいです。いつも姉はあなたに元気をもらっていましたから」

「そうか……。さあ感傷に浸ってる場合じゃないな……。いこう・・・」

大広間らしき場所へ行くとボスがすっかり出来上がっている

「ボス……。連れてきましたよ」

クラウスはルチアを連れてボスの前に行く

「おお、ご苦労だった。これは褒美だ……」

そう言つて男は金貨の入った袋をクラウスの足元へ投げつける。

「女早くこつちへ来い……」

ルチアは言われたとおりに側に寄る

ふつとクラウドは鼻で笑い、袋を蹴り飛ばす

「俺はこんなもの要らないほしいのはお前の命だ!」

ボスはピクリと眉を動かす

「そこに立っている女に見覚えがあるだろう・・・」

「そういえば、どこかで見たような・・・」

「そいつはお前が殺したフラルの妹だ!俺はてめえをゆるさねえ!」  
そういうとクラウドは男に切りかかる

「ボスを守れ!殺っちまえ」

男たちもいつせいに切りかかろうとしたがルチアの起こした風に阻まれる

「そうはさせない!」

「あぐっ・・・」

ルチアの足元にクラウドが倒れこむ

「クラウドさん!？」

「へっへっへっへ・・・。酔っ払いだと思って舐めてんじゃねえよ・・・」

ボスの蹴りがクラウドの腹に入り、クラウドは吹き飛ば

「ぐあっ」

「クラウドさん!!」

ボスはルチアの肩をつかむ

「あの女の妹かぁ・・・。いい女じゃねえか姉さんとおんなじように遊んでやる」

そのまま肩をつかんでいる手に力をいれ服を引きちぎる、ルチアの白い華奢な肩があらわになる

「部下の言ったとおりだ・・・。」

「くそっ、ルチアばうつとするな!逃げろ!!」

クラウドの言葉でルチアはハッと我にかえり、ボスとの間に風を発生させクラウドのもとへ駆け寄る

「なにやってんだ!逃げろ!!」

「そんなことできません!!」

ボスが歩み寄ってくるのが横目でみえる

「俺はどうなつてもいいから早く！」

脳裏に姉のさみしそうな微笑む顔がうかぶ

「ルチアがうらやましい……。私は人を守る力がない……。だから、あなたは人を守って、優しい子だから出来るわよね？」

幼い頃、力を持たずに生まれた姉との約束

「私は……。お姉ちゃんの恋人のあなたを見捨てることは出来ませんし、ここで守れなかったらお姉ちゃんとの約束も守れない」

ルチアは手のひらをボスのほうへ向ける

「水よその姿を凍てつかせ、風とともに切り裂いてしまいなさい！」

出現した水は小さな氷のナイフとなって男たちを襲ったが炎によって溶かされてしまった

「そ……。んな……。」

ちから技では勝てないからこれにかけたのに……

「残念だったなあ……。」

ボスはそう言いクラウスの上に炎の槍5本を出現させ、そのまま落とした

4本はルチアが出した水の壁で防げたが残りの1本は本物の槍でクラウスのわき腹を裂いた

「クラウスさん!!」

「嬢ちゃんちよつと待ってなすぐにそいつにとどめをさして相手してやる……。」

ボスが剣を振り上げ突き刺そうとしたときだった

普通の狼の数倍もある黒い狼がボスを襲い人間の姿になった

「とどめを刺されるのはどっちだろうな……。」

「アイル!!」

アイルはルチアのほうを向き怒鳴った

「だから、ぜつつつつつたに動くなつて言ったんだ！」

「ごめんなさい……。アイル危ない！」

数人の男がアイルを襲おうとしたが急所に矢が刺さり倒れた

「ここで、ルチアを怒鳴ってもしょうがないでしょ……。まった  
くアイル君はカルシウムが足りないのよ！」

レイはアイルをオカマ口調でからかいルチアに微笑を向ける

「俺たちが来たからもう大丈夫だよ」

「レイ……」

「そうだぞ……。だからそっちの男を治療してやれ」

「わかった……」

アイルたちのおかげで数分で全滅してしまった

「よわいつ弱すぎる……」

クラウドのケガはルチアが治し完治した。今は眠っている

「良かった……。でも良くないか、守れなかったし……」

「まあか、相手が悪かったんだもともとお前の力は‘守る’ために  
あつて‘傷つける’ためじゃない……」

アイルはルチアの頭を撫でながら続ける

「死んでないからいいじゃねえか」

ルチアは苦笑した

「アイルの言うとおりだね……。ありがとう……」

ありがとう……。ルチア……。クラウドを守ってくれて……

フラルの声が3人の頭に響く

それと、クラウドも旅に連れて行ってあげて……。これが本当の  
彼の力じゃないの……。アイル君ならわかるわよね……

アイルはじつとクラウドを見つめる

「わかってるさ……。こいつは俺の兄貴だしな。最強にして最恐  
と謳われた男だ……」

そしてふつと笑う

「最恐のほうは消えちまったみたいだけどな」

二人とも・・・、そしてクラウド・・・。ルチアを頼みます・・・

そう言い残し、フラルの気配は消えた

## No.5

月明かりに照らされ二人と一匹は町への道のりを歩いている

「ったく、なんで俺が・・・」

獣化して狼になってクラウスを運んでいるアイルがぶつぶつ独り言をつぶやいている

「だってえ、私運べませんもの」

「だまれ……。キモイ……」

そういわれたレイはうそ泣きをする

「ひどおい！レイちゃん泣いちゃうわ」

ルチアはその光景を呆然と眺めている

あんな、険悪だったのがうそみたい

「くすくす、仲良いね」

「だろっ？」

嫌そうな視線をレイに送ってから、ルチアにたずねる

「おまえ、肩寒くないのか？」

ルチアはそういえばと破かれた服を見る、レイがマントを渡した

「それでも羽織っておけよ」

「おい、それ俺のдар？」

「いいじゃんか。俺じゃなくてルチアに貸すんだから」

「それもそうだな」

ニコツリとルチアは笑みをうかべマントを羽織る

「ありがとう、あったかいね……」

ふらりとルチアは糸の切れた人形のように倒れた

「おっと、危ない。ルチア？どうした？」

アイルはため息をついた

「力の使いすぎだろう……。体が弱いのに無理して使うからだ」

「へえ、早くついてあげてれば良かったなあ」

レイはルチアを抱き上げる

「なんか、こうやって見ると人形みたいだよな・・・」

「ああ・・・」

宿に着き、ベッドに二人を寝かせた。

レイはアイルに気になっていたことをたずねる

「なあ、アイル。さっきルチアの姉さんはクラウスさん？はもっと強いつていつてただろ」

アイルはそうだなと相槌をうつ

「なんで、あんなに弱かったんだ？」

「それは、これのせいだろう・・・」

小さな巾着から綺麗な彫刻が入っている女物の指輪を取り出した  
「？」

「これは、俺たちのもってる力を弱めるためのリングだ・・・」

「なんで、それをお前の兄貴が？」

兄貴とつぶやき横目でクラウスを見る

「さあな、それは本人に聞いてみないとわからない。ただ一ついえることがある」

「??」

レイは頭の上にはてなマークを浮かべる。アイルは目がすわっている  
「お前さあ・・・。本当に馬鹿だな。よく見てみるよ」

指輪をレイに渡す

「レイちゃん傷ついたあ。・・・この彫刻・・・花？」

「その、花の名前わかるか？」

アイルは頬杖をつき、横目でレイを見ている

「いやん。そんなに見つめないでえ」

「いいかげん、殺すぞ？」

握った拳からは殺気がにじみ出ている

「・・・ハハハ・・・。じょーだんです。ルチアって言う真っ白な花だろ？馬鹿にすんなよってあ！」

やれやれとため息をつきながら視線を正面にもどす

「そう、たぶんそれはルチアに送るものだ・・・」

なんでそれをクラウスが持っていたかはわからないが、アイルは体力の限界を感じていた

「ふわ／＼あつと久々に獣化したから疲れた．．．。俺は寝る。お休み」

「じゃあ、俺も寝ようっと。お休み、愛しのア・イ・ル君っ」

プチンと小さく何かが切れた音がした

レイトン・オズワット

「な．．．なんですか？」

「俺が良く眠れるようにしてやるよ……」

振り向いたその笑顔はひきつっている

「あは．．．あははは．．．。アイル．．．ご．．．」

ごめんとあやまろうとしたレイの顔にきれいにアイルの拳がクリーンヒットし、そのままベッドへ倒れこんだ

「ふんっ、俺は才力マに興味はねえ……」

翌日、朝食をとっている場で昨日の惨劇を知らないルチアはレイの赤く腫れている顔を凝視している

「ルチア、どうしたの？もしかして俺に惚れちゃった？」

「レイ……、また俺のよーつく眠れるおまじないが欲しいか？」

アイルはニコニコしながらレイを見るが目が笑っていない

「ごめなさい、冗談です」

「ねえねえ、おまじないって何？」

「ん？内緒……。悪い子にはレイだろうが兄貴だろうがやっっちゃうけどな」

「私にはないの？」

「ルチアは物好きだなあ。いつたいんだぞう」

ルチアは顔色を変えて首を振り、アイルを見つめた

「えっ？やだ、私にはやらないでね。」

アイルは苦笑しながらルチアの頭をなでた

「ルチアはいい子だからやらないよ………」



「今、多分って言ったよね？」

アイルの顔を不審そうに覗き込む

「そりゃあ、昨日みたいな行動をしたらな・・・」

アイルはしれっとしている

「あ・・・。。。。ごめんなさい」

目を潤ませながらルチアは謝る

「アイル君女の子泣かせるなんて最低！レイちゃん見損なったわ」

「うるせー、黙ってる。はあ・・・、昨日はお前が無傷だったから良かったものももう少し自分の置かれている立場を考えてくれ・・・」

ルチアは目を見開き、俯く

「それは巫女としての立場ってことだよな・・・？ルチアとしての立場じゃないよね？」

「まあ、そうなるかな・・・」

顔を上げたルチアの頬には涙が流れている

「ひどい・・・。アイルなんか大嫌いっ」

ルチアは宿屋から出て行ってしまった

「ルチア！・・・。はあ、アイル。お前の言いたいことはわかるけど、あんな言い方したら傷つくってわかるだろ？」

アイルは答えない、レイはさらに続ける

「お前からだったらもつと他に言ってもらいたい言葉があったかもしれないだろ？」

「ふんっ、じゃあお前が言ってやればいいじゃないか・・・」

「だから・・・」

アイルは乱暴に立ち上がった

「あいつなんかほうっておけばいいんだ！そのうち戻ってくるだろうし、俺は知らない・・・」

レイは負けじとアイルを睨む、アイルはふいっと目をそらす

「ちようど、買いたいものもあったしな。俺は出てくる」

アイルも宿屋から出て行ってしまい、やり取りを見ていたクラウド

はため息をつく

「頑固なところは変わってないな……。それじゃだめだって本人もわかってるだろうに」

「昔からあなんですか？」

「うん……。まあ、ケンカなんかしてやっちゃまったーと思ってもあいつから誤ったことはないな」

レイは大きいため息をついた

「はああああ……。ルチアがかわいそうだよ……」

ルチアは町外れにある小高い丘に来ていた。

その丘には美しい色とりどりの花が咲き乱れている。

「アイルのばか……。心配したんだぞの一言ぐらい……。視界が涙でかすむ」

「うそでもいいから言ってくれたっていいじゃない……」

ルチアはひざを抱え込む

「……。っ……。ひつく……」

慰めるように温かい風がルチアを包んだ

「そういえば……。これをルチアに渡し損ねた……」

クラウスは指輪を取り出した

「それって、俺たちの力を制御するためのものですね？」

「そうだぞ」

「なんで、それをあなたがルチアに？」

クラウスはベッドの上に座り、天井をあおぐ

「本当はフラルがルチアに渡そうとしてたんだ……。でも、その前に死んじゃった……」

「なぜフラルさんはルチアに……？」

「ルチアは体がよいだろ。それなのに無理して力を使おうとする……。」

「だから、使わせないために……」

黙ってうなずきレイのいれたコーヒーが入っているカップを口に付ける

それっきり二人は黙ってしまった

アイルは町の広場にあるベンチに頭を抱え込んで座っている。

大きなため息を一つついた

「はああああ．．．．．。 やっちまった．．．、あいつ．．．．．泣いてたな．．．．」

そっぴいながら顔を上げる、広場にある噴水の流れている水は朝日を受けキラキラと輝いている

「あいつの涙みたの何年ぶりだろう．．．。 どんなにつらくても人前ではほとんど泣いたことなんてなかったからなあ．．．」

膝の上に頬杖をつき、噴水を見つめる

「あいつどこににいるかな．．．」

アイルは立ち上がり、ルチアを探し始める

しばらくして、小高い丘にいくと花畑の中にあるアイルの紺色のマントが見えた

「いた．．．．」

膝を抱え込んで泣いているルチアの前にしゃがみ抱きしめた

「ルチア．．．．。 ごめん．．．」

ルチアは顔を上げアイルをみつめる

「ア．．．．イ．．．．ル、なんでここに？」

アイルは申し訳なさそうに頭を下げ謝る

「ごめん．．．。 お前の気持ち全然考えてやらなくて．．．」

さらに続ける

「本当はすごい心配したよ．．．．。 だからもうあんなあぶないまねしないでくれ．．．お願いだ．．．」

ルチアはアイルに抱きつく

「ありがと．．．。 大嫌いなんで言っでごめんね」

アイルはルチアの耳元でニヤリと微笑む

「でも、心配かけたお仕置きはしなくちな・・・」  
そう言ってアイルはルチアを押し倒す、二人は背の高い草花に隠された

No. 6

二人はすつぽりと草花の中に隠れる、アイルは貸したマントをはずす  
「ちよっ．．．．、アイル何して．．．やあっ」

アイルは破かれたまんまで露出している肩に口付けをする

「アイルウっ、や．．．だあ．．．」

ルチアは必死に抵抗するが男の力に勝てるわけもなくされるがままにするしかなかった

「な．．．んで？」

肩にうずめていた顔をあげ、意地の悪い笑みを浮かべる

「ん？お仕置き」

「おしおきって？」

ルチアは目を潤ませている

「あやまつたじゃない．．．．」

「．．．．．．．．」

アイルはそんなルチアをじっと見つめる

「なんで、だまつてるのよう．．．」

答える代わりにルチアにキスをし、舌を絡ませる

「．．．んっ．．．」

唇をはなしアイルはルチアを抱き起こす

「残念．．．。人が来そうだ．．．」

そりゃ、そろそろ昼だし子供も遊びに来るかため息をつき、横目でほつと安心しているルチアを見る

ルチアと目が合った

「な．．．何？」

「いや、ルチアはひどいと思って．．．」

「え？なんで？」

集まってきた周りの人々に聞こえないようにルチアの耳元でつぶやく  
「拒否ったじゃん．．．」

「それはアイルが・・・。」

顔を赤くして反論するルチアを見て、ニヤリと笑う

「・・・いじわる・・・。」

そっぽを向いてしまったルチアをよそにアイルは手を引き歩き出す

「ほらっ行くぞ。新しい服でも買いに行くか」

「うっっっ」

「何唸ってるんだよ・・・。」

アイルは眉間にしわをよせて、振り返る

「なんでもありませんっ」

「なんだよ・・・。」

「えっっっ」

アイルは苦笑する、店員が困った顔でルチアにたずねる

「あの・・・、何かご不満が？」

「いや・・・、露出がちょっと多いかなと思って・・・。」

そう言つと店員がぼそりと耳元でつぶやいた

「彼が喜びますよ・・・。」

ルチアは顔を真っ赤にさせて俯く

「どうします？」

「　　っ、買います・・・。」

「お買い上げありがとうございますーす！！」

宿屋に着くとレイが迎えてくれた

「あ、お帰りー。その様子だと仲直りしたみたいだね」

よかったとレイは胸をなで、ルチアの姿に驚く

「そんな露出が多い服どうしたの？」

露出が多いといっても胸元は鎖骨が見えるていどで、スカートは短い・・・

頬を紅潮させて俯くルチアをみてアイルが代わりに答えようとしたときにレイが続けた

「もしかして、俺を誘ってるの！？・・・いでえ！」

アイルがニコニコしながらレイにアイアンクローをくらわしている「笑えない冗談を言う口はどのくちなー？裂くぞ？」

「ひいひいひいっごめんねアイル君っ、大丈夫よおレイはアイル君だけだから」

アイルの背中を悪寒が走る、頭をつかんでいる手に、さらに力をいれる

「キモイからやめろって言ってんだろ」

「その服だと巫女である証の紋章が目立つな・・・」

クラウスがそうポツリとつぶやく、そしてハッと思い出したようにルチアの手をつかんだ

「きやつ・・・」

「そうだこれ、フラルから君に」

そう言っつて小さな巾着から指輪を取り出して左手の小指につけてやった

「お姉ちゃんから？」

ルチアはジッと指輪を凝視している

「君に力を使わせないためにだよ。君を心配して作ったんだ」  
指輪の上にルチアの涙が一粒零れ落ちる

「　　っ、お姉ちゃん・・・ありがとう・・・」

その様子を見てふつとアイルは微笑んだ

「よかったな、ルチア・・・」

「うん・・・」

ルチアはニッコリと笑う

このときは君の笑顔が“消える”なんて思いもしなかった

「さて、明日はこの町を出よう。まずは第一の神殿に行かなきゃな」  
「そうだね、ここから南だよな？」

アイルは頷く

「ああ、そうだよ。じゃあ、明日は早いから早く休もう」

自分の部屋に向かう、アイルの背中を見て、ルチアはさみしそうに微笑みつぶやいた

「どんな未来が私にあっても、私がこの世界から消えてしまうようなことになったとしてもアイルは笑っていてね……。私は大丈夫だから、みんながアイルが幸せならそれで十分だから……」



「アイル!! 起きて」

アイルはもそもそと布団の中で動く

「う・・・ん、まだ日の出前だろ？」

ルチアはでもと続ける

「早く出るって昨日言っただじゃない」

「どうせ、二人ともおきてないんだろ？」

「そりゃ、そうだけど・・・。アイル? きゃっ」

ルチアをベッドに押し倒してキスをする

「ん・・・うつ。アイル・・・?」

「早起きは三文の徳って言うし。昨日の続きでもやるか」

「! や! 二人がおきちゃう」

「じゃあ、声出すなよ?」

「アイルのいじわるっつ。あ・・・いやっ・・・」

そりゃどーもと言って首筋に舌を這わせる。ルチアの甘い吐息が耳

元にかかる

「・・・ひ・・・あっ、や・・・めてえ・・・」

アイルはルチアの背中に手を回してチャックを降ろす。ふくらみが

あらわになった

「アイルのえっちい・・・。!!」

桃色の突起を口にふくみ甘噛みをし、片手でスカートをめくり秘部

を薄い布の上から撫でる

「~~~~~っ、く・・・うつ」

「我慢してんの?」

ルチアは涙で潤んだ瞳でアイルを見つめる

「は・・・あっ、だって・・・声出すなって・・・」

そうだったと頭をかいて、ルチアに優しくキスをした

「今日はこれくらいでがまんしてやるよ」

「アイル……。ねえねえ……」

ルチアは服を直して立ち上がったアイルの服のすそを引っ張る

「どうした？」

「朝になるまで、だっこして」

「はぁ？ いいけど……、急に甘えんぼさんになっちゃったな」

そう言つてベッドに座りルチアを抱きしめる、ルチアはアイルの背中に手を回した

「本当にどうした？」

「わかんない……。不安なの」

「ルチア……」

アイルは抱きしめる手に力をこめる。その時レイがドアを叩いた

「アイルー？ なんか大きい音がしなかった？」

パツとルチアが離れる。アイルは返答をした

「なんでもない……」

「あつそう。んじゃ、おやすみ」

また、寝るんかい！

アイルは二度寝をしようとしているレイに心の中で突っ込みを入れた  
「つたく……。ルチア？」

ルチアのほうに振り向くと、ルチアもアイルのベッドで眠りについていた

「はぁ……。こいつもかよ……」

『不安なの』

ルチアのさきほどの言葉がよみがえる

「まさか……。こいつ……」

自分がどうなってしまうか知ってるんじゃ……

アイルの脳裏に不安がよぎる

「ちくしょう、俺はどうしてやることも出来ないのかよ」

「レイ、遅い……。二度寝なんかするからだ。ばあか」  
「レイちゃん傷ついたあ」

メソメソとウソ泣きをするレイをよそ目にため息をつく。

「いいかげん、気持ち悪いからやめてくれないか？」

「やあよ。だってアイル君の反応が楽しいもんっ」

「じゃあ、もう何も反応しない」

「それじゃあ、つまんねーだろっ。なっルチャ？」

ぼうつと二人のやりとりを見ていたルチャがハッと気づく

「ふえ？あ、うん、そうだね」

「ふざけてないでそろそろ行かないか？」

呆れかえっているクラウドスが口を開く

「「「はあい」」」

「んじゃ、行くか……。第一の神殿に……」

「行きますか」

4人は様々な思惑をもち宿を出る

そこはまるで時代に置き去りにされたような寂しいところだった

「ここっ？」

ルチャは地図を開き確認する

「ここだねえ」

「こんな、ボロいの！？」

「そりゃあ、誰も管理してないから」

そう言つてアイルは神殿……塔を見上げる

昔は美しく輝いていたであろう塔を

「ねえ、早く入らない？ここであることには変わらないんだから」

「そうだな、入るか……」

建物の中に入るとそこは光はぼうつと白く輝いている魔法の産物だけ……。4人には異質な空間だった

「こんなの、教科書や歴史書でしか見たことないな」

光源をみたアイルがつぶやく

「アイル！！危ない！」

アイルが振り返ったときにはクラウドが襲ってきた魔物を切り伏せていた

「あ、さんきゅ兄貴・・・」

「ぼーっとするな、それが命取りになるぞ」

「悪い・・・」

すぐ横で大きな物音がしたと思うとルチアとレイが魔物を倒していた

「まだ、こんなにいる・・・。きりがないよ。」

「ルチア、ここは俺に任せて」

「え、うん？」

レイは弓を上に向けて矢を放つ

「はじけろっ」

レイがそういうと一本の矢がはじけたくさんの光の矢になり放物線を描いて刺さる

「すごおい・・・」

「ほらっ、今のうちだあつちに階段があつたから行こう」

「たまには、やるじゃねえか」

階段を駆け上がりながら、アイルがレイに言う

「やるときはね・・・。やれば出来るのよ」

「へえ・・・」

階段を上り終わるとそこには大きな祭壇がある

「ここで、祈りをささげるのか？」

「みんな！！下がって！」

ルチアが3人の前に出たと思ったら、普通のライオンの数十倍の大きさはある羽の生えた魔物がたっていた

「ここまでたどり着いたものを見るのは何年ぶりだろうか・・・。久しいな・・・。お前たち何者だ？」

「お前こそ何者だ？」

アイルは魔物を睨みつける

「ほう、ずいぶん肝が据わっている小僧だな……。名はない、この守護者だ」

「へえ、女神は魔物を守護者にするのか」

「アイル!!」

ルチアが制したがアイルは聞かない

「我は神獣と呼ばれるものだそこいらにいるものと勘違いするのではない。もう一度聞こうお前たちは何者だ？」

そこまで言って神獣はルチアの胸の紋章に気付く

「それは、紋章か……。娘、お前が今回の巫女か？」

「あ、はい。祈りをささげに参りました」

「武器は持っているようだな。武器を持て」

ルチアは戸惑う

「は？何ですか？」

「これは試練だ。我に勝てなければ祈りをささげることを許さん」

一同は武器を持った、アイルが剣に手をかけながら言う

「はっ、おもしれえ。ケンカ売ったことを後悔すんなよ」

## No.7 (後書き)

初めて・・・、でもないですが、ちょっぴり(?) えっちに挑戦してみました・・・

だめですね、慣れてないから全然へたですね。お恥ずかしいです

ぎゅっとルチアは剣の柄を握った

「ルチア！おびえるな。おびえたら負けだぞ！！」

小さい頃、先生に戦いを教わったことがあった。そのときの記憶がよみがえる

「ルチア……。おびえちゃだめだと言っているだろう」

ルチアは俯き、涙をこぼす

「だって、怖いもん」

フラルが口を開く

「先生、まだルチアは幼いですし。無理がありますよ」

「……。しかたない。だが、これだけは覚えておけ。敵に情けをかけるな」

「情け？」

ルチアは首を傾げる、先生はうなずいた。

「そうだ、お前は優しい。だが、それが命取りになることもあるかもしれない」

「大丈夫だよ先生！！」

ルチアはニツコリと笑う、その笑顔は不思議と二人を安心させるものだった

「だって、みんなほんとうはきつといい子なんだよ」

「ふう……。ルチアにはかないませんなあ」

そう言つてルチアの頭をなでる、えへっとルチアは笑った

おびえるな、おびえたら負けだ……

「ルチア！！お前はさがつてろ！危険だ」

アイルはルチアを戦前から退けようとしたが、ルチアに阻まれる

「だめよアイル……。これは私の戦いでもあるの。みんなに任せることはできない」

「でも……」

「大丈夫、みんなを援護するだけだから。だってアイルは前にこう言ってくれたじゃない『お前の力は“傷つける”ためじゃない“守る”ためにあるんだ』って」

苦笑いを浮かべたアイルはルチアから手をはなす

「ったく、おまえにはかなわねえなあ」

その時、神獣の爪がレイを襲おうとしたが、ルチアの力によって阻まれた

「うわっ、あぶねえ。さんきゅ、ルチア」

「みんなを傷つけることは許さないわ」

神獣は見下ろし冷たい視線をルチアにやる

「ほう、なかなかやるではないか」

じとりといやな汗がルチアの背中を流れる

「あ、あたりまえでしょ。守られてばかりなんていやよ」

「では、これは防ぎきれるかな？」

闇の因子が神獣の口元に集まり、4人めがけて放たれる。

「これをくれば、もう無理だろう。退屈しのぎにもならなかったな」

帰ろうとしたその時背後からクラウドの声があった

「それはどうかな？ 敵に背後を見せるとはまだまだだな」

神獣の反撃は間に合わず、クラウドに首もとを切られ倒れる

「アイル！ とどめを刺せ！」

「わかってる」

剣を振りかざしたアイルをルチアが止めた

「待って！」

「……！？」「……」

「なんで、止めるんだよ」

ルチアはアイルの問いかけを無視し神獣へ近寄る



「おいっ、危ないぞ」

そして、しゃがみ治療を始めた

「な．．．ぜ．．．？」

「この世に死んでいい命なんてないよ、綺麗ごとだけだね．．．。悪いやつなんていない．．．そう信じて育ってきたから」

そう言われた神獣は苦笑し、静かに目を閉じる

「そうか、お前は濁りのない美しい心を持っているのだな。試練はいらなかったかもしれないな」

「それだけじゃないんですよ。」

閉じた目をつつすらとひらく、ルチアはニツコリと笑った

「？」

「．．．あなたが居なくなったらここは誰が守っていくんですか？大切な場所なんでしょう？」

「そうだったな．．．。ありがとう．．．。さあ、我はもう大丈夫だ早く祈りをささげなさい」

ルチアはすくつと立ち上がり、祭壇の前へ進む。

そして、静かに目を閉じ手を組むとルチアの体が光り輝いた

「まぶしい．．．」

光のまぶしさに3人は目を細める

ルチアから輝きがなくなると、アイルたちのほうへ向き直る

「終わったのか？」

「うん、ばっちり」

「そうか．．．。」

神獣が外へのゲートを作り、促す

「貴女たちに女神の加護がありますよう願う．．．。ルチア．．．と言ったな。」

「？ はい」

「お前ならこの儀式の本当の意味．．．女神の願いを理解できるだろう．．．。」

「????」

ふつと笑い神獣は姿を消す

「我は眠りにつくとうしよう」

クラウスが3人を促した

「長居は無用だ、行こう」

「ああ、儀式の本当の意味ってなんだろうな・・・」

「そうだね」

外に出ると青空が広がっていた

「うーん、やっぱり外の空気が一番だねっ」

「だな、さて次の封印は・・・」

「王都に近い場所だな」

地図を開いて確認したレイが口を開く

「王都・・・なのか？」

クラウスがレイに確認する

「地図は読めるよ！！そこまで方向オンチじゃない！！！！」

アイルとクラウスはため息をつく

「どうしたの？」

「いや・・・なんでも」

レイとルチアは顔を見合わせ首をかしげる

「「？」」

「まあいいや、行こうぜ」

「あ、うん」

## No. 8 (後書き)

アクション？シーンはいかがでした？

次回はアイルとクラウスの出生について書きたいと思います。

## No. 9

相手の出生なんて気にしたこともなかった・・・  
そんなの関係ない、気にしないくらい“一緒”にすることが楽しかったから・・・

「アイル、大丈夫？少し休む？」

ルチアは顔色が真っ青なアイルの横顔を心配そうに見つめる。

「へ？あ、ごめん。大丈夫・・・」

眉間にしわをよせ、「本当に？」という顔をしているルチアを見て、アイルは噴出した

「くくっ、大丈夫だって」

「あ、笑うなんてひどい！心配してるのに・・・」

「ごめんごめん、でも本当に大丈夫だから」

納得いかないという顔をしているルチアをなだめて気付かれないようにため息をついた。

少し黙って話題を探していたルチアはそういえばと顔をパツとあげる

「ねえ。王都って二人の故郷だったよね？」

「え！？そうだったの？」

レイはおどけた声を出した

「知らなかったなあ。だからこの近辺の地理に詳しくなかったのか・・・」

クラウドは眉間にしわを寄せ、ルチアとレイを睨む

「そんなことはない、当たり前だ。それと無駄なおしゃべりは体力を消費するぞ」

「「はあい」」

二人は顔を見合わせて首をかしげてアイルとクラウドに聞こえないように話した

「なんか、機嫌悪い？」

「そーだね…。小さい頃の苦い思い出でもあるとか？」

ルチアは眉間に皺を寄せてうーんと唸る。

その姿にレイは噴出す

「ルチア、さっきのクラウドみたいだよ？」

「え？そう？レイ、ひどおい。……でも、本当になんでなんだろう。せつかく故郷に帰ってきたのに」

そう話している間に王都の姿が見えた

「あれが、王都だ」

アイルが城壁を示した。ルチアはほうつと感嘆の吐息を漏らす

「きれい…。すごい、素敵なところだね！アイル」

ふつとアイルは苦笑する

「そうか？それはよかった」

ルチアはニツコリと笑う、アイルは首をかしげた

「どうした…？」

「ん？苦笑いつていうのはなんだかイヤだけど…。やっと笑ってくれたと思って」

「さっきも何度か笑ったけど…」

今度はルチアが苦笑した

「だって、ぜんぶ眉間に皺がよっていましたよ？」

そう言つて、まねをしてみせる

俺、こんなに心配かけていたんだ。悪いことしちゃったかな？

「どうかした？」

「いや…なんでも。」

城壁まで近づいてくるとアイルとクラウドは隠れるようについてきた。

だが、見つかってしまうものは見つかってしまうのです。

「殿下！？うわぁー、本物だー。」

うわぁ、失礼な兵士だ…とルチアとレイは内心つつこみをいれつつやり取りを聞く

「おまつ、何を失礼なことを申し上げているんだ！クビになりたい

のか!？」

もう一人の見張りの兵士が駆け寄ってきて叱責し、二人に向かって深々とお辞儀をする。

「はぁ、数々の失礼申し訳ございません。」

「いや…、別に」

「お二人ともお久しぶりでございます。少し見ない間にこんなに大きくなられて…、爺はうれしゅうございます!」

そのまま、連れ去られるようにして四人は城へ連れてこられた。

「両陛下も姫様も大変心配されておいででした」

初老のヴァンは王家に仕える人だとルチアはアイルから説明を受けた。

「そちらの方々は?」

「あ、そうだった。紹介がまだだったな…」

そしてルチアを示す

「ルチア・フォン・エルウッド、今回の巫女だ」

ルチアはお辞儀をした

「はじめまして。」

「ほお、巫女様ですか。大変美しい方ですなあ」

で、次にとレイを紹介する前にレイは自分で自己紹介をした

「レイ・ロト・ルルスです。アイル様の親友です!」

「ルルス?ルルスと言いますと、四大貴族の一つの?」

「Yes!そうです」

「アイルって王子様だったんだねえ。どうりで気品があると思った」  
謁見までにと客室に通された四人は出されたお茶菓子と紅茶に手をつける

「気品は、お前のほうがあると思うが…?」

「そうかな?それよりも、レイがルルス家の跡取りだって言う方が驚きだよ」

アイルとクラウドもルチアに同意する

「たしかに、こいつからは気品なんか微塵も感じないけどな」

レイはむっとアイルをにらむ

「品はどっこいдарお？失礼だぞ！」

「なんだと？もう一辺言ってみるや」

二人のやり取りを見ながらルチアは溜息をつく。その様子をみたクラウドが顔を覗き込む

「どうした、ルチア？こいつらがうるさいなら黙らせるが…」

ルチアは首を振った。言い争いをしていた二人も黙る

「いえ…、みんなすごいなあと思って。それに比べて私なんて…」

うつむいたルチアの手には涙が一粒落ちる。震える肩にクラウドがそつと手を置いた

「出生なんて関係ないだろう？…お前には巫女という大任があるじゃないか」

肩から手を離して優しく頭をなでる

「地位なんか気にすることない。胸を張って生きればいい」

「クラウドさん…、ありがとうございます」

ルチアは涙をぬぐいほほ笑む、クラウドは苦笑する

「全部、フラルの受け売りなんだがな。第一こんなことで落ち込むなんてらしくない」

「そうですか？……そうですね」

ふふっとルチアは笑った、それにつられて三人も笑う

「身分の違いはあれどおれたちは“仲間”だ」

「うん、そうだね…」

レイがそれに付け加える

「旅が終わってもだ。な、アイル？」

「そうだな」

その場に私はいないかもしれないんだ…。私がいなくても今みたいに笑っていてね

「ルチア？どう…」

コンコンと扉をたたきメイドが入ってくる

「両陛下、イヴ様のお支度が整いました。謁見の間に来るようにとおっしゃっております」

クラウドがうなずく

「わかった、今行く。ほら、ルチア涙をふいて」

「あ、はい…」

謁見の間に入ると黒色の髪をした少女がアイルに抱きつく

「お兄様！」

急に抱きつかれたアイルはバランスを崩した

「うわっ、イヴ…。元気そうだな」

「はいっ有り余ってます。お兄様もお元気そうですねによりです」  
有り余ってなくてもいいんだけどな…

アイルは苦笑して頭をかいた、その様子を見た椅子に座っている女性が姫をたしなめる

「イヴ、うれしいのはわかりますがアイルもお客様も困っているでしょう？」

「はあい…」

イヴはしぶしぶとアイルから離れた

「父上、母上お久しぶりです」

「うむ、クラウドもアイルも元気そうですねにより」

玉座に座っている人の良さそうな若くて痩せている男性がうなずく  
アイルは王妃様に似てるんだ

「そちらのかわいらしいお嬢さんが巫女様なのですか？」

「あ、はい。はじめまして、ルチア・フォン・エルウッドと申します」

ルチアは深いお辞儀をする、その姿をみた王妃がふふつとほほ笑む  
「礼儀正しいお嬢さんね。アイルも見習ってほしいわ。ねえ、アイル？」



「うつ…。耳が痛いです…」

「レイ君のほうもヴァンから聞いたぞ。」

レイは軽くお辞儀をする

「それにしても、すごいわ！巫女様の護衛に選ばれるなんて」

「そうですね、巫女様の足手まといになっっていないか心配ですが」

ルチアはあわてて首を振る

「いえっ、こつちが足手まといになっっていないか心配です」

「謙虚なお嬢さんだ。そういえば、用があるから来たのだろう？」

国王はアイルに問いかける

「はい、神殿が王都の近隣にあると聞いたので知っていることはないかと…」

国王は少し考え、顔をあげる

「調べさせよう。その間はここでゆっくりと休め、客室の用意もしておく」

アイルは頭を下げる

「ありがとうございます」

「じゃあ、私は巫女様とお話したいわ！」

そう言ってイヴはルチアをひっぱる。急に引つ張られたルチアはバランスを崩すが、すぐに立て直した

「いいですわよね、巫女様？」

「あ、はい。私でよければ」

ルチアはほほ笑む、その笑顔をみたイヴもにっこりと笑った

「じゃあ、行きましょう」

ぐいっとルチアの手を引いて駆け出す

「イヴ！あんまり迷惑掛けるなよ！」

くるっとアイルのほうを向いて、下を出す

「お兄様と一緒にしないでくれます？」

ぺこっとお辞儀をして退出する二人の後ろ姿を見て王妃がくすりと笑う

「女性と話すのは私や側仕えぐらいだからうれしいのね。ルチアさ

んはお姉さまのような方ねえ」

クラウスも同意する

「ええ、この二人をよくまとめてくれますよ」

「そうなの？…まあ、アイルったらイヴのこと言えないじゃない」

「すいません」

「ところでクラウス。あなたの恋人はどうなったのかしら？ご遺族の方とはお話しなさったの？」

クラウスは視線をそらす

「王妃、その話はまた今度でよいではないか。せつかく帰ってきたのだから」

「それもそうですね。では、晚餐までゆっくりしていなさい」

「はい、失礼いたします」

三人の去っていく姿を見て、王はさみしそうに微笑む。

「少し見ない間にたくましくなりおつて。」

「そうですね。でも、中身はまだまだ子供ですわ」

王妃はため息をおとし、肩をすくめる。

「ああ、まだ。目が離せんなあ」

王は三人が謁見の間を出るまでその後ろ姿を見つめていた。

ルチアはイヴに手をひかれ庭園に来ていた。

庭園を見まわしたルチアは感嘆の息をついた

「きれい……。すてきですね姫様」

姫に示されるままベンチに腰を下ろし、にこりとほほ笑んだ。

「うん。ここはお城の中で一番好きな場所なの！」

「そうなんですか。ここは見晴らしもいいみたいですね」

高台に建っている城なので、あたりを見回せば城下町はもちろん城壁の外まで見渡すことができる。

「あ……あの……」

「？　どうかしましたか？」

「巫女様はアイル兄様の恋人なの？」

突然聞かれた質問にルチアは真っ赤になって答えた。

「え、あの、その……。そんな、恐れ多いこと……」

「なんで？　身分なんて気にすることないじゃない」

イヴは首をかしげて続ける。

「だって“巫女”っていう大任を任されているんだもの」

その言葉を聞いたルチアはクスツと笑った。

「私なんか変なこと言った？」

「いえ、クラウスさんと同じことを言ったので……」

「クラウス兄様と……？　ふうん。私、あの人のことよくわかんないわ」

イヴはうつむいてしまってどんな表情になっているかはわからなかった。

「？」

「そういえば、結局二人は恋人なの？」

「そう思いたい……」

それを聞いたイヴはぱつと顔を輝かせてわらった。

「素敵！　こんな美しい方に好かれるなんて。ねえ、お姉さまってお

呼びしてもいい？」

「えっ。よろしいですけど…、両陛下は何か言わないでしょうか？」  
ルチアは心底驚いたという顔をした。

「大丈夫よっ。だから、あなたも敬語は使わないでイヴって呼んで？」

少し戸惑ったような表情を見せたがすぐに優しく微笑みかけた。

「じゃあ、お言葉に甘えて…」

「本当！？うれしい！私ずうっと御姉様がほしかったの！」

そう言っているとイヴはルチアに抱きついた。

そして、そのまま胸に顔をうずめる。

「お姉様はいい香りがするね…。やさしい香りがする」

「そう？」

ルチアは抱きついていているイヴを優しく抱きしめ頭をなでる

「うん、それに温かい。……………」

「イヴ？」

静かになってしまったイヴは寝息をたてている。

その様子を見たルチアはくすつと笑う。

「はしゃぎすぎて疲れちゃったのね…。可愛い、私もねあなたみたいな妹が出来てうれしいよ」

だから今はこのまま…

お姉ちゃんもこんな感じだったのかなと優しくかった姉を思い出しながら静かに目を閉じた。

ルチア…

暖かい風が二人を包み込んだ

その、静寂は一人の男によって壊された。

「ルツチア……。見いっけ！」

庭園の入口からルチアを見つけたレイが飛びつこうとしたがあと少しの所で届かずに転んだ。

「レイ！？だ、大丈夫？」

ルチアが声をかけるとおでこをこすりながら起き上った  
「うゝん？大丈夫だよ」

それよりもルチアの腕の中で寝ているイヴを見る。

「起きなくてよかった。騒がしくってごめんね」

「ああ、疲れちゃったみたいなの」

「そっかあ…。じゃあ、ベッドで休ませてあげたほうがいいんじゃないかな？風も冷たくなってきたし」

ルチアはこくりとうなずき立ち上がろうとすると、レイがイヴを抱き上げた。

「ありがとう」

「どういたしまして。さ、行こう」

城内に入りイヴを寝かせて一息ついた二人はイヴの部屋を出た。

先ほどからずっとレイを見つめていたルチアにレイは声をかけた

「ルチア…。どうしたの？」

「え？あ、ごめん。意外と気がきくんだなと思って…」

「それ、失礼じゃない？」

そう言っているとレイはルチアの手を引き与えられた客室に入りベッドへルチアを押し倒した。

「あ…、レイ…ごめんね」

「いやだって言ったら？」

レイはルチアの腕から片方の腕を放して、ルチアの唇をなぞる  
ルチアの顔色がみるみる変わるのを見て、クスツと笑った

「う・そ」

「え？」

ルチアから体を離して、抱き起こす

「聞こえなかった？嘘だよって言ったの」

「あ…。ひどおい。レイの意地悪！」

「そんなに怒らないでよ。せっかくの可愛い顔が台無しだよ？」  
レイは優しくルチアの頬に触れる

「ほら、笑つてよ」

「ふふっ、レイにはかなわないね」

「うん、可愛い可愛い」

その時部屋のドアが開き、アイルが顔をのぞかせた

「ルチア？いるのか？」

「アイル！どうしたの？」

「あ、いた…。ん？」

アイルはいつの間にかにルチアの腰に手を回しているレイを見る

「おい…。レイ」

「ん？なあに、アイル君っ」

レイはアイルが手をボキボキと音を鳴らしながら近づいているのに  
気付かずにへらへら笑っている。

「そんなに、寿命を縮めてほしいのか？」

ルチアはあわててアイルを止めた

「ア、アイル！ストップ！！けがしたらどうするの？」

振りかざしたこぶしを下ろしたら、ルチアはほっと胸をなでおろした  
「私を探していたんでしよう？どうしたの？」

「あ、いや。イヴが探していたから」

「そうなの？じゃあ、行かなきゃ」

ルチアはベッドから立ち上がりアイルの手を引く

「行こうよ。レイは？」

レイも立ち上がった

「じゃあ、一緒に行く」

アイルはいやな顔をした

「いや、お前は来なくてもいいよ」

「ええ…。レイちゃん傷ついちゃう」

「キモい…」

部屋から出て廊下を黙って歩いていると、ルチアが口を開いた

「ねえ…。アイル。クラウドさんとイヴちゃんって仲悪いの？」

アイルは考え込むように唸る

「うん。仲悪いって言うより、なんて言ったらいいんだろう…。  
“兄”っていう実感がわかないんじゃないか？」

それを聞いたルチアはアイルを見上げ首をかしげる

「なんで？」

「いや…。兄貴はまったく言っていていくらいここにはいなかったし。特にあいつが生まれてからは…。放浪癖が激しかったから…」

「ふうん。そうなんだ…。あ！だからあの時『よくわかんない』って言っていたんだ…」

アイルは一瞬目を見開いたがそうかとうつむいた

「確かによくわかんないかも…。俺もわかんないことがあるし」

「そっか…」

再び沈黙の状態になるとそれを破るように廊下を走るかわいらしい足音がする。

「あ！お姉様見つけ」

いきなり飛びつかれたルチアは転倒しそうになったがレイが支えた

「お姉様？お前いつから…」

「さっきよ！だってそう呼んでもいいって言ってくれたもの！」

「そうなのか？」

レイに支えられ体制を立て直したルチアがうなづく

「うん、まあ…。だめだった？」

「別にいいけど…。イヴ、あんまり迷惑かけるなよ？」

イヴは負けじとべーっと舌を出した

「お兄様に言われたくないわっ。あ、そうそう3人ともお母様が呼んでいましたよ」

3人は顔を見合せた。

「とりあえず行ってみるか…」

ルチアはものすごい数の奇麗なドレスを前にただ呆然と突っ立っていた。

なぜ、こんなことになっているかつて？それは数時間前のこと…

王妃の私室に入ると、紅茶を片手に優雅に読書しているところだった。

「母上、お呼びだったと聞いてきたんですが…」

アイルは王妃に恐る恐る尋ねると、王妃は本から顔をあげた。

「ああ、晚餐にその恰好で出るわけにもいかないでしょう？洗濯して直してあげたいし」

そう言われてみればと3人は自分の服を見る。

確かにところどころ傷などがついていている場所がある。

「だから、服をねお貸ししようと思って…。ルチアさんは私が選んで差し上げるわ。」

につこりと王妃はルチアに微笑みかける。

「あなたたち男性陣はヴァンに選んでもらいなさい」

はあいと返事をして3人は部屋を出た。

一緒に来ていたイヴが王妃へ飛びつく。

「ねえ、私も一緒に選んでいい？」

「私は良いけれど…。ルチアさんはいかがかしら？」

「あ、構いませんよ。」

そうと言って王妃はほほ笑んで読んでいた本を机の上においた。

「じゃあ、先に体を洗っていらっしやい。イヴ、案内して差し上げて」

「わかったあ。行く」

そう言つてルチアはイヴに手をひかれ、お辞儀をしながら部屋を出て行った。



「本当に礼儀正しいお嬢さんねえ…。アイルと結婚してくれないかしら…」

「くしゅんっ」

手をひっぱっていたイヴは振り返り首をかしげた。

「風邪？」

「うーん、違うと思うけど…」

心配そうに顔を曇らせたイヴを見てルチアはほほ笑んだ

「大丈夫だよ。誰かが噂でもしてるんじゃない？」

にこつと笑ったイヴを見て、ルチアも笑った。

「あ、ここがお風呂だよ。出た時に着る服は用意しておくからね」

「ありがとう」

「じゃあ、ごゆっくりどうぞ」

パタンと脱衣所の扉をしめた。

着ていた服を脱ぎ、浴室へと入ると見覚えのある濃い緑色の髪の毛が湯けむりの中から見えた。

その人物が振り向きルチアと目が合う。

「え…きゃ、きゃあああああああ！！」

幸いルチアは体にタオルを巻いていたけれどびっくりして前を隠すようにしながら後ずさる。

レイは素早くルチアの後ろに回り、口をふさいだ。

「んんっ」

「しいーっ。騒ぎを聞きつけてアイルが来たら俺殺されちゃうでしよ？」

ルチアの口元から手を離して苦笑した。

「あ、ごめん…。でも、なんでここに？」

「え？ああヴァンさんに風呂に入らせて言われてね。ルチアも？」

ルチアはうなずいてあたりを見回した。

「2人は？」

「プライベートバスって言うの？そっちに行ってるよ」

「ここはお客様用ってこと？」

「だろうねえ…。あ、このことは内緒ね？」

レイは口元に人差し指を立て笑った。

「俺、まだ死にたくないからさ」

くすつとルチアも笑った。

「そうだね…」

「ほら、風邪ひいちゃうから早く湯船につかりなよ」

言われた通りに湯船に入ったルチアから少し離れた所にレイも入った。

お互いに気まずくなくなって沈黙が続いたが先に口を開いたのはレイだった。

「お前の髪ってプラチナブロンドの中に少しだけ銀髪が混じってるんだな…」

「うん、そうなんだ。お父さんが銀髪なの、確かお母さんがプラチナブロンドだって聞いたっけな…」

聞いたっけという言葉聞いてレイは謝った。

「あ、ごめん…」

「うっん、いいよ。お母さんがいなくても全然さみしくなかったから…」

「そうか…」

再び沈黙が続いてしまい耐えきれないといった感じにレイが立ち上がった。

「俺先に出る」

「あ、うん。また、あとでね」

しばらくして体と髪を洗って風呂から出て今にいたるということである。

茫然と突っ立っていると後ろから王妃が声をかけた。

「髪はちゃんと乾かしたみたいね…」

「王妃様…」

振り向いたルチアに近寄り顔に触れる。

「??」

「肌がとってもきれいなね。何色でも似合いそうだわ…」

そうねと言って近くにあった薄い桃色のそれなりに落ち着いた感じのドレスを手に取る。

「これなんかどうかしら？あなたの肌の色がよく映えると思うのだけれど…」

「いいと思います」

そうと笑ってそばにいるメイドを呼びドレスを渡す。

「じゃあ、着替えさせて髪を結ってあげて頂戴」

「はい、王妃様。では、こちらへ…」

メイドはルチアを別室へ促した。

「あ、王妃様」

「何か？」

ルチアはほほ笑み、お辞儀をする

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

そのころアイルたちはというと…

「なあ、ヴァン…」

アイルに呼ばれ振り向いた

「なんですか？」

「もつとラフなのない？」

そう言われたヴァンはあきれとも怒りともなんとも複雑な表情をした。

「何を言っているのです。小規模とはいえこの城下町に住んでいる貴族の方たちを招くのですからしっかりした格好をしてください」

「はいはい、わかったよ。着ればいいだろう？着れば…」

溜息をつきながらアイルはきゅっとネクタイを締めた。

そこへ着替え終わったレイとクラウドが入ってきた。

「お。様になってるじゃん」

アイルは鏡越しに返事をする。

「お前もな。はあ、こんなカッコしたのいつ以来だろうか…」

「さあ。やっぱ、なれないかつこうはきついな…」

そこへメイドが一人入ってくる。

「失礼します」

クラウドがドアを開け、返答をする。

「どうした？」

「晩餐の用意ができましたので、謁見の間にお集まりください」

「わかった。すぐ行く」

それを聞くとメイドはお辞儀をして出て行った。

3人が謁見の間へ行くとすでに王、王妃はもちろんイヴや貴族たちが集まっていた。

きよろきよろとあたりを見回しているアイルにクラウドが声をかけた。

「アイル？どうした？」

「いや、ルチアはどうしたのかなって思ってた…」

「アイル？」

後ろから声をかけられはつと振り返る。

「どうしたの？だれか探してるの？」

振り返ったその先にいたのは今まで探していたルチアだった。

3人はルチアの美しさに見とれてしまう。

「アイル？私、変？」

「え、いや。似合ってる。きれいだよ」

そう言われたルチアの頬は薄紅色に染まった。

アイルに似合ってるよと言われたルチアは頬を薄紅色に染めて微笑む。

「ありがと…。3人もとっても似合ってるよ」

話しかけようとしたアイルをさえぎるようにして城下町に住む貴族のお嬢様たちが押し寄せてきた。

「アイル様っ、おかえりなさいませ！今宵は私と踊ってくださいますわよね？」

「いいえっ、アイル様は私と踊ってくださいるんでしょう？」

ルチアはふっと笑ってバルコニーのほうへ行ってしまった。

その、様子を見たクラウドとレイはため息をつく。

キレたかな…？

「アイルはモテモテっすねー」

「そうだなあ…。俺はもう恋人がいるってのが知れ渡ってるからなあ…」

そう言っただけクラウドはルチアが行ったほうを見る。

「様子見に行っただけだよ。いいんじゃないか？」

レイはため息をついてうなずいた。

「うん、ちょっと行ってくるよ」

そしてぼそっとつぶやいた。

「あんまり泣かしちゃったかしてるとっちまうぞ…」

「ん？なんか言ったか？」

「なんでもない」

踵を返し、バルコニーの方へと走って行ってしまった。

その後ろ姿をみてクラウドは首をかしげる。

「なんだ…？」

「アイルったらデレデレしちゃって…。ほんととバツカみたい…」

溜息をつきながら手すりへと突っ伏した。

「あれつくらい積極的にならなきゃだめなのかなあ…」

「いや…。それはそれでちょっと引くぞ…」

ぱつと振り返るとレイが苦笑交じりに立っている。

そして、ルチアの方へ手を差し出した。

「ったく、あいつもしょうがねえよなあ…」

ルチアは手を取り立ち上がった。

中からはダンスが始まったのであろう音楽が聞こえてくる。

「一曲お願いできますか？お嬢様」

クスツとルチアは苦笑した。

「いいけど…。私踊れないよ？」

「そこは俺が…。いや私がリードしますよ」

「ふふつ。お願いします」

一方そのころアイルは貴族の娘たちにうんざりしていた。

ルチアはどっか行っちゃおうし…。もう、勘弁してくれ!!

その様子を遠くから腕を組んで見ていた、クラウドにイヴが声をかけた。

「アイル兄様はどこですか？」

「これはこれは姫様…」

「そんな他人行儀でなくてもよくってよ…。きよ…」

頬赤らめるイヴにクラウドは首をかしげてイヴの顔を覗き込む。

「きよ？」

「兄妹でしょ」

「そうだな…。アイルならあそこで貴族の娘たちに囲まれてるぞ」  
そう言つてアイルのいる方向を指差した。

イヴは軽くため息をついた。

「でしようね…。ルチア様はあちらでレイとかたと踊ってらしたもの」

「まったく…。女心が分からないやつで困るな」

くつくつくと笑うクラウドを尻目にイヴは頬を膨らまし腕を組んだ。  
「笑いごとじゃあございせんわ！！ルチア様がどんな気持ちでいるかも知らないで……」

「しかし、これはこれでいいんじゃないか？」

イヴはクラウドを見上げて首をかしげる。

「ここで、ルチアがポツとできてアイルと踊ってみろ……。ねたみの対象になるだろうなあ……」

「そう言われてみれば……。しかたのないことですよわね」

イヴは視線をアイルの方へもどしてからバルコニーの方へとめぐるした。

そして溜息を一つ落とした。

「悩みがつかないな……」

「そうですね……」

クラウドはそつと目を閉じてふつと笑った。

「だがそれも楽しみのひとつだろう」

「悩みが？」

「人間……悩みが無くなったらお終いだぞ」

そこへ、娘たちから逃げてきたアイルがやってきた。

アイルは息を切らし肩で息をしている。

「助かったあ……。ルチアは？」

「知らない。自分で探せば？」

イヴとクラウド2人に言われてしまったアイルはぽかんとした表情を浮かべ、大きなため息を一つ落とした。

「そりやないだろお」

クラウドはアイルがため息をつくのを見た後、入口のほうが騒がしいのに気がついた。

クラウドが武器に手をかけるのを見て、アイルもばつと後ろを向く。

「なんだ…？なんでこんなに騒がしいんだ？」

イヴがそばにきた男性に何があったを訪ねた。

「なんか、教団の騎士が来てるみたいですよ」

「教団の？」

イヴは首をかしげて人だかりの方へ歩み寄っていく。

そこへ騒ぎを聞きつけた王妃が急いできた様子で肩で息をしながらやってきた。

「イヴ！なんですか？この騒ぎは…」

その時ぱつと人だかりが割れ、鎧をきた騎士が近づいてきた。

「ご機嫌麗しゅう、王妃様。お騒がせしてしまってもうしわけございません」

王妃は鎧をとらない騎士たちを見て眉を寄せた。

「鎧を取るのが礼儀ではなくって？」

「すいません。それはわかりませんね…。こちらに巫女様に来ていはずです。呼んでいただけません…」

騎士が王妃に問いかけるよりも早くどこから騎士めがけてナイフが飛んできた。

ナイフが刺さった騎士は断末魔をあげてその場に倒れたかと思うと灰となって消える。

それを見た王妃やその周りにいた人たちは眼を見開いた。

「王妃様！その人たちは人間じゃありません！」

「巫女様…？」

ルチアは王妃と騎士たちの間に入る。

「何用で来たんです？魔物の方々…」



ルチアがキツと睨みつけると騎士は笑い始めた。

「さすが巫女だな。我らが魔物だと見破るとは…。構える必要はありませんよ、あなたたちが大人しくしてくれればね。関係のない人たちには危害は加えません」

いつの間にかに騎士たちを取り囲むように武器を構えて立っている、アイルたちをルチアは制した。

「3人ともやめて、ここで被害を出すわけにはいかないわ」

「巫女は自分の立場を分かっているようだ。…単刀直入に言おう。我らにひとりについてきてほしい」

「なっ、てめえ何言って！」

「アイル!!」

アイルはルチアに制されて舌打ちをする。

「嫌だと言ったら…？」

「その時は、こちらで捕らえている聖獣を殺させていただきます」  
聖獣という単語を聞いたルチアは眼を見開いた。

「聖獣…を？そんなこと…」

「できるんですよ。さあ、どうしますか？」

「NOとは言えないみたいね…。わかった、行きます。その前に着替えてきていい？」

騎士はうなづいた。

「ええ、いいですよ。武器も用意していただいて結構ですよ」

「ありがとうございます」

王妃ははっとなって周りにいる召使に命令する。

「すぐに着替えと武器の用意をお願い」

「かしこまりました」

召使は一礼をして走って去っていく。

「では、ここで待っていますからどうぞ」

ルチアも一礼をして客間へと向かった、それをイヴが追った。

「お姉さ…巫女様！なんで、あいつらの言っことなんか聞くんですか!？」

「聖獣が死ねば…祈りを捧げられない…。世界を浄化できなくなってしまうの」

「浄化できない…」

ルチアはくるつと振り返り苦笑いを浮かべる。

「イヴ…、そんな顔しないで。私は大丈夫だから、ちゃんと帰ってくるから」

そしてそつとイヴを抱きしめる。

「御姉様…。絶対…絶対ですわよ」

「うん、わかった。じゃあ、アイルたちと待っていてくれるかな？」

「わかりましたわ」

イヴが広間へ戻るとアイルが腕を掴んできた。

「ルチアはなんて!？」

「…大丈夫だから…って…」

「ルチア…」

数分後支度を済ませたルチアがやってきた。

「お待たせしてしまつて、すいません…」

「いえ、かまいませんよ。いきなり来たこちらが悪いんですから」  
踵を返し行こうとするルチアの腕をアイルはつかもつしたが…

「ルチ…」

その手は振り返ったルチアによって止められた。

振り返ったルチアはさみしそうに微笑み、その頬を一筋、涙がつた。  
つた。

アイルの手をつかむその手は震えている。

「ルチア…?」

「心配してくれるのはうれしいけど…。それはとっても悲しいよ…」  
…」

ルチアは手を離し行ってしまった。

「どうということだよ!!!ルチアアア!!!」

アイルはその場に崩れ、床を拳で叩く。イヴは顔を手で覆った。

王妃はため息をつき、アイルの前にしゃがみこんだ。

「母上…？」

パンと広間に音が響いた。

アイルは茫然として母親に叩かれた頬を抑える。

「あなたは…あの子のこと何にもわかってないわ…」

そしてすくつと立つと客にはおわび、召使たちには的確な指示を始めた。

イヴも召使に連れられ部屋へ戻ってしまった。

残されたアイルはただ呆然とするだけだった。

「アイル…」

「なんだよ…」

クラウスはため息をつく。

「母上の言うとおりで。お前はルチアのことを何にも分かっていない。お前は頭を冷やしてきなさい」

そう冷たく言われたアイルはふらふらとバルコニーへと向かった。

「まったく、アイルは…。過保護な保護者かっの」

レイは首をすくめ、拳を握る。

「俺だつて何にもできない自分に腹立たしいよ」

「そうだな、それはみんな同じことだ」

アイルは夜空を見上げた…

見上げた先にある月は不気味に輝いている…

暗い夜道を魔物に囲まれてルチアは歩いていた。

見上げた先にある月は道を照らすように青白く輝いている。

ルチアはさつきから疑問に感じていたことを口にする。

「あの…」

前を歩いている鎧をきた魔物が返事をした。

「なんですか？」

「なぜ…私に武器を持たせたんですか？もしかしたらここであなた達を殺して逃げるかも知れないんですよ？」

魔物は少し黙ってから夜空を見上げ、口を開く。

「そのような事をする方ではないと思ったからです…」

そして、立ち止まって振り返った。

鎧で表情は見えないがきつと笑っているのだろうとルチアになぜだか分かった。

「あなたは魔物にとっても希望なんですよ」

「？」

それっきり魔物は黙ってしまった。

城下町の郊外にきれいな教会がそびえ建っている。

魔物は正面の扉を開けて中へと促した。

言われたとおりの中へ入り、正面を見てルチアは感嘆の息をもらす。

「きれい…」

目の前には月明かりに照らされ宝石のように輝くステンドグラスがある。

魔物は奥へと向かい、ルチアもそれについて行く。

そして、立ち入り禁止と書いてある扉の前まで行き振り向いた。

「こちらです…。この扉をくぐり、通路を通った先に神殿があります」

「！？　なんで？人と聖獣は相いれないもの…。だから、神殿は人

里から離れた所にあると聞いたことがあります」

魔物は小さく首を振り中へと入る。

「昔は…人間の崇める対象は聖獣だったのです。うんと昔ですがね…」

そして、立ち止まり振り返る。

長い間立入禁止とされていた通路は荒れ放題で長い時間をおもわせる。

「少し…長くなりますが、昔話を聞いていただけますか？」

「はあ…。かまいませんが」

「では…」

昔…この巫女の制度ができる前の話です。

その当時は天人は下界には干渉することはありませんでした。

そのせいもあって人間と獣人はもちろん、魔物も人間たちと同じように街中で生活していたのです。

そして均衡を保っていたのが聖獣でした。

聖獣が神そのものだったのです。でも、突然その均衡は崩れました。天人が干渉してきたことで聖獣は人里から離れ、魔物は人間たちの敵となったんです。

唯一ここの神殿だけが昔と変わらない場所形で残っているんですよ」

「そんな…ひどい……」

「そうですね…」

また再び沈黙が訪れる。

長い通路を通り、階段で下りて今度は地下通路を通ってやっとのことで神殿へとついた。

聖獣がいる間へと案内されてはいると正面には同じくらいの年齢だろうつか…茶髪の少年が聖獣の上に座っている。

魔物が一礼するとボーイソプラノの声で答えた。

「ごくろう。へえ…、こいつが今回の…。結構美人じゃん」

少年は聖獣からおりてルチアへと近づくと、ルチアは威圧感に後ずさった。

「はじめまして、巫女サマ」

「あ…、はじめまして」

「僕の名前はシリウス。天人です」

天人という言葉聞いてルチアは目を見開いた。

「天人…。あ、だから聖獣…を…？」

「そうだよ」

「なんで私をここへ…？」

シリウスはどんどんルチアへと近づいた。

「僕が会いたかったからさ…。ルチア」

シリウスがにこつと笑ったかと思っただけでルチアは急に気が遠くなるのを感じた。

崩れるように倒れこむルチアをシリウスが支えた。

「おっと…。この子には僕の実力は強すぎたかなあ…。体が弱いんだったよね」

「そうみたくです」

「ふうん。僕は一回下がるよ…。聖獣の監視よろしくね」

「はい、かしこまりました」

シリウスはルチアを抱きかかえて踵を返した。

『いいですか、みなさん。天人の皆様には特別な能力ともう一つ特徴があります。それは髪が金髪なのです』

ルチアが目覚めると見知らぬ部屋のベッドの上だった。

「やあ、目が覚めた？」

はっと気付くとシリウスも自分も裸であった。

「きゃっ、なんで裸！？」

「大丈夫何もしてないから」

「あ…」

思わずルチアはさらさらしたシリウスの髪へと手を伸ばし触れた。シリウスは一瞬驚いた表情になったが、すぐににこりとした

「ああ、さつきは茶髪だったからね」

「きれい…ですね」

「君もきれいな髪だよ」

ルチアはポツと顔を赤くした

「ありがとうございます。ひゃっ」

体をビクンと震わした。

シリウスが体を指でなぞったからだ。

「は…あっ」

「体もとてもきれいだ」

ルチアはさすがに抵抗したがそれが叶うことはなかった。

「い…やあっ。　　！！」

「だめだよ、ルチア」

「体が…体が…」

シリウスはルチアの頬に触れ、微笑みを浮かべる。

「いいことを教えてあげようか。天人の声は巫女を縛るんだ」

「そ…んな。ああっ」

シリウスはルチアの首筋、豊かな乳房にキスを落としていった

「ねえ、ルチア。僕も君と一緒にいたいな」

「はい…。いいですよ…」

体がいうことをきかない

「僕が天人だっていうのはほかの人には内緒だよ」

「はい…」

シリウスはルチアから体を離し、服をルチアへと投げた。

「じゃあ、祈りをすまして帰ろうか」

「アイル、少し落ち着いたらどうだ…」

うろつろと熊のように徘徊するアイルを見かねた国王が声をかけた。

「しかし…」

そこへ扉の叩く音がした。

「誰だ？入りなさい」

メイドが息を切らしてはいってきた。

「失礼します！巫女様が！巫女様がお帰りになられました」

バルコニーの手すりに肘をついて外を眺めていたイヴがパツと顔を輝かせて振り向いた。

「それで！けがとかは？」

「ないようですが、大変お疲れの様子で客間へと案内しておきました」

「ルチア――！」

アイルは勢いよく扉を開けた。

ルチアはベッドの上に座っている見知らぬ男の腕の中で眠っている。  
「お前誰だ？」

「はじめまして、シリウスと言います。これから、一緒に旅に同行することになりました。よろしく」

「そんなの、聞いてねえぞ」

殺気立っているアイルにシリウスはクスツと笑った。

「巫女様……。ルチアからはもう許可を得ましたから」

それよりも……と話を続けた。

「あなたは思いやりのない方ですね。ルチアは疲れて眠っているというのに……」

ふうとため息をついてルチアの頬に触れた。

シリウスの言葉にアイルはむっとする。

「てめえは失礼なやつだな」

そう吐き捨てると部屋から出て行った。

そのあとを追おうとしたレイは振り返りざまにシリウスの薄気味悪い微笑みを見る。

クラウドは扉をたく音がしたので読んでいた本から顔をあげる。

「入っていいぞ」

扉から顔をのぞかせたのはレイであった。



失礼しまーすと言って入ってくるレイに椅子を用意する。

「どうした？こんな夜遅くに」

「いや、部屋にいたらアイルが愚痴を言いに来そうで…」

「そうか…。シリウスのこともあるんだろう？」

レイは用意された椅子に座って苦笑した。

「お察しの通りで。あいつ、ただもんじゃねーと思うんだ」

「確かに…。気をつけないといけないな」

クラウスの言葉にレイはうなづく。

「ああ…。問題は猪突猛進な王子様なんだよな」

「すまん、猪突猛進な弟で」

クラウスはため息交じりに苦笑する。

「よく、観察しないと…」

レイはすうっと目を細め不気味に輝く月を見た。

## No.15(前書き)

R15ものです。

苦手な方はご注意ください。

目が覚めたルチアはバルコニーに出て月を見上げて溜息をつく。  
シリウスが触れ、口付けをした場所にふれる。

よかった…。跡はないみたい…

ルチアは背後から人が近づいてくるのに全く気付かない。  
ぐいっと後ろから抱き締める腕があった。

「！！」

ゆつくりと振り向くと唇を奪われる。

黒い髪だったのですねにアイルだと気づく。

「んっ…。はあ…アイル？どうし…んうっ」

アイルはさらに深い口付けをする。

「はあ…。アイル？」

アイルは黙ったままルチアをベッドまでつれて押し倒した。

「アイル、やだ…。怖いよ…どうしちゃったの？」

ルチアが涙を浮かべるとアイルは首元へ頭を押し付ける。

「もう、今夜はがまんできない…」

「え？…やあっ」

あつけにとられているルチアをよそになれた手つきでネグリジェを  
するりと脱がした。

「アイルウっ。恥ずかしいよ」

そんなルチアを無視して様々なとこに口づけをする。

それはルチアを快感にさせるのに適したものであった。

「ああっ…。は…あん…や…あっ」

アイルが秘部を守る下着へと手を伸ばすのをルチアは気づかない。  
そこへ振れたことで初めて気づき、体を震わす。

アイルはそれを交わして侵入する。またルチアが体をビクンと震わ  
す。

「あっ……………」

そちらに気を取られているうちにアイルは豊かな乳房にある小さな突起を舌で転がし含む。

「い……やあつ……。は……。あつ」

身をよじらせて逃れようとするルチアを力で抑え込む。

「アイルっ。やめてえ……。いきなり……。なんでこんな……」

ルチアは喘ぎながらアイルに必死に抗議する。

やっとアイルが体を起して口を開いた。

「言ったる……？我慢できないって。ルチアは俺のこと嫌いか？」

悲痛そうな顔で見詰められたルチアはアイルに抱きつく。

二人を夜風が包み込む。

「違う……違うの。ただ、驚いただけだから……。ごめんね」

アイルを見つめるルチアの顔は……体は月明かりを受けてより一層美しさが増していた。

それを見て激しい衝動に駆られたアイルはごめんとつぶやいてベッドに押し倒してキスをする。

「ごめん……。ほんとに我慢できないんだ」

そう言っアイルは体を重ねた。

その瞬間ルチアの体を熱いものが駆け巡った。

風の冷たさに目を開けると外はまだ暗かった。

優しく包み込むアイルの腕から抜けるルチアは体をゆっくりと起こした。

そのままタオルを探し出して部屋についているシャワールームへと向かった。

汗を落としシャワーを止めてルチアはふうと息をつく。

まとわりつく濡れた髪をまとめると、体を拭いてシャワールームから出てネグリジェを着た。

そしてそうつとベッドへと近づいてアイルに布団を掛ける。

アイルの髪へと優しく触れた。

「ごめんね。アイル……」

こんなにもあなたを苦しめてたなんて知らなかった…  
ルチアの流した涙がアイルの頬へと落ちた。

明るくなってから目を覚ましたアイルはそばにルチアがいないことに気づく。

「ルチア？」

ルチアは服に着替えてバルコニーで祈りを捧げていた。

起き上ったアイル気づいたルチアは振り向いて笑顔を見せた。

「おはよう、アイル」

「ここの祈りも済ませたみたいだし。そろそろ行こうか？」

荷造りしながらクラウドスがルチアに問いかけた。

ルチアが答える前にシリウスが口をはさむ。

「そうだね。先を急ごう」

「俺はルチアに聞いたんだが…」

じろりとシリウスをにらみつけるクラウドスをルチアがなだめた。

「クラウドさん。落ち着いて…」

横からアイルも口出しをした。

「俺も気にいらねえな…。お前の態度」

「もうっ、みんな仲良くしてよ！」

ルチアが怒鳴ると4人はルチアのほうを向いた。

レイはうなずく。

「俺も同感…。これから一緒に旅するんでしょ？こんなんでどうするの？」

そう言われてしまつてアイルは黙つてしまふ。

「そうだな…。行こう…」

城門のところでイヴが見送ってくれた。

「お兄様、いつてらっしゃいませ。ルチアお姉さまに迷惑をかけないでくださいね」

「わかつてるよ。お前こそ父上と母上を頼んだぞ」

「はい、わかつていますわ。では、ルチアお姉さま、がんばってくださいね」

ルチアは小さくうなずきほほ笑んだ。

「うん、ありがとう」

その様子を少し離れたところからシリウスが眺める。

おかしい…。どうして笑える？

「次はどこへ行くんだ？」

レイがルチアに問いかけると、ルチアは首を振る。

「それが…わからないの」

「わからない！？どうして…」

「普通、聖獣がしめしてくれるはずなんだけど…」

ルチアはうつむいてしまう。

助け舟を出すようにシリウスが続けた。

「次はここから北へ歩いて行ったところにあるよ。確か…なんとかつていう貴族の領地にあつたはずだ」

レイは首をかしげた。

「北？俺のどこじゃねえな。なんて言っただけ…確か…クラウドといかいう貴族だったような」

「クラウド…？」

ルチアがつぶやくとクラウドがレイに続けた。

「確か、夫人の実家は大きい商家だったな」

「うん、その実家との縁で少しだけ交流があるよ」

「じゃあ、領地へは楽に入れる？」

今度はシリウスがレイに尋ねる

「うん、大丈夫だと思うよ。そっか…領地に入れなきゃ始まらないもんな」

あたりは暗くなってきたが町らしきものはどこにも見当たらなかった。

「やっぱ、1日じゃ着けないか」

レイはため息をつきながら、野営をする場所を探していた。

「雲行きも怪しいから、屋根を作れる場所を探さなきゃ」

ルチアは夜空を仰ぐ。

空には星のひとつ、月すら見えなかった。

「あ、あそこがいいんじゃないか？」

アイルが指さした場所は小高い木が立つ、泉のそばだった。

「あそこなら魔法で屋根が作れそう」

ルチアが同意する。

周りに気づかれないうちにシリウスがルチアに近寄る。

「あとで少し話がある…。」

「う、うん…」

ひと段落ついた頃に雨がぽつぽつと降ってきた。

ルチアはみんなに気づかれないうちに林の中へと入る。

「何の用ですか？」

ルチアが発した声の先にある暗闇から出てきたのはシリウスだった。  
「やっと、二人きりで話せる」

そうつぶやいたときにはルチアの背後にいて後ろから抱き締めた。  
そしてその右手でルチアの胸を愛撫する。

「あつ…。いやあつ」

ルチアの抵抗はきかなく、左手がスカートの中へと侵入する。

「んっ…」

「ねえ、あの男と関係をもったでしょ？僕の許しもなしに…」

「あなたに…はあつ…何の権限……があつて」

「何の権限？」

ぐいっと乱暴にルチアの顔をつかみ自分の方へ向ける。

ルチアの瞳は快楽と痛みと恐怖で涙目になっている。

「巫女は天人の言うことをきくものだよ？わかってるよね？」

「……」

「僕が同行するのを許した時点で君に自由はないんだって理解してるよね？」

小さくうなずいたルチアの体を1度解放して、木に体を押し付けた。  
そうして柔らかい唇に口づけをする。

「じゃあ、僕は先に戻ってるから…。自分の置かれている立場をよく理解しておいてね」

ルチアはその場に力が抜けたように座り込む。

「もっ…いやだ…」

どうして…。こんなに自分を追い込まなきゃいけないの？笑うの



は疲れたよ

うずくまったルチアの体を冷たい雨が濡らした。

気がつくとルチアは花畑の中で座り込んでいた、そこへ自分よりすこし金が濃いプラチナブロンドの優しそうできれいな女性があらわれた。

「あなたは…？」

女性はほほ笑んで首を振り、ルチアをやさしく抱きしめた。

「どうか、どうか私の望みをかなえてちょうだい…。この世界をあるべき姿にもどして…」

「お願いよ。可愛い…」

そこでルチアの意識が途切れる

可愛い…愛おしい私の子…

「…！！ルチア！大丈夫か？」

目を開けるとそこには心配そうな表情を浮かべているアイルの顔があった。

「アイル…？」

「よかった。戻ってこないから心配したんだぞ」

あたりを見回すとクラウスとレイも安堵した表情で立っていた。空には青空が広がっている。

「熱は…なさそうだな。いけるか？ルチア」

「え？あ、うん。私は大丈夫」

無理に笑って見せた、作り笑いになったのはいつからだろう…？

巫女は祈りを捧げていくごとに人間としての感情が消えていく…

そう何かで読んだのをルチアは思い出した

この体を女神に差し出すために、余計な感情はいらないのだと

昨日の天気が嘘のように晴れていて、暖かい日差しが照らす。

お昼ごろになってやっと一行は都市についた。

「ここが、クラウドイッテいう都市だ。俺は入れるように話してくるからみんなはここで待っていてくれ」

そう言っただけで4人から離れていった。

しばらく経つとレイが戻ってきて町中へと入る。

「ルチア、ここは大きな港があるんだ。珍しいものもいっぱいあるんだよ。あとで見に行かないか？」

朝から元氣のないルチアを心配してレイが市内観光に誘う。

ルチアは小さくうなずく。

「よし。とりあえず宿を探そう」

その時、アイルにぶつかつた少女がいた。

「あ、すいません。大丈夫ですか」

よろけた少女の体をアイルが支える。

「ええ、平気ですわ。…!!」

はつとしたように少女はアイルを見つめ、頬を赤く染める。

アイルは首をかしげる。

「お嬢様ー！」

少女の教育係であろう女性が走ってきた。

「やっと見つけましたよ。クラウドイッテ家の娘である方が教養のないようでは困るんですよ。さ、かえりましょう」

少女はため息をついてアイルの方へ向く。

「わたくしの名前はココナ・ド・クラウドイと申しますの。あなた方は旅人のようですね。」

「はあ…」

「助けていただいたお礼もしたいですし、今夜は屋敷に泊まっててくださいませんか？」

「いいんですか？」

「ええ。では、まいりましょう」

屋敷の応接間に案内され、主人夫妻が入ってきた。

「これはうちの娘がご迷惑を……。！？レイ君ではないか。久しいですな」

「お久しぶりです。…本当にお世話になってしまってもよろしいのですか？」

主人は笑ってうなずく。その笑顔からは人のよさがにじみ出ている。「もともとですとも。すぐに用意させましょう。ああ、私はアーノルドと申します。こちらは妻の…」

「カタリナです。……！？」

カタリナはルチアに目を止める。明らかに驚いてる様子を隠せないようだった。

「カタリナ？どうかしたか…？」

アーノルドが心配そうに顔を覗き込むとカタリナは首を横に振った。

「いえ…、なんでもありません」

「そうか…。では、みなさんゆっくりしてってください」

「ありがとうございます」

5人は頭を下げた。

部屋を出るとレイはルチアを促す。

「じゃあ、ルチア。行こうか」

「うん、図書館があつたらそこにも行きたい」

「わかった。じゃあ…」

屋敷をでて町中へと歩いてくルチアの背中をカタリナは見つめた。

あとで確かめなくては…

No.17 (前書き)

だいぶ間が開いてしまいました。  
ごめんなさい…

屋敷を出て通りを歩いているとレイがぼつりとつぶやいた。

「ルチアってさあ…。孤児院で暮らしてたんだよね？」

「うん、院長先生が亡くなって、学園に入学するまではね」

ルチアは急にどうしたの？と首をかしげた。

「いや…。カタリナ夫人がお前を見て驚いていたなと思って…」

クラウスは確かにとうなずく。

「フラルから両親について何も聞かされてないのか？」

そう問われてルチアは目を伏せる。

「うーん…。お父さんのことはちょっとだけ覚えてる。私が物心ついたぐらいの時に自殺しちゃったんだよね。お母さんのことは何も…」

そこへ、ココナがアイルの後を追いかけてやってきた。

「旅人の方！わたくしが町をご案内いたしますわ」

「ココナ嬢、勉強は？」

レイが尋ねるとココナは人差し指を唇の前に立てる。

「逃げてきましたの」

につこりと笑う笑顔にルチアは胸騒ぎを覚える。

そしてアイルに向けて話しかけた。

「ねえ、私別行動でいいかな？一人でも平気だから」

「じゃあ、俺が案内するよ。約束したし、な？いいだろ？」

レイはにこつと笑ってルチアの手を引いた。

「ほら、行こうぜ」

「じゃ、俺も…」

アイルが伸ばした手をレイが振り払う。

「おまえはダメ。あ、もちろんシリウスもね。4人で楽しんできてよ」

クラウスは目でうなずき、3人を促す。

「さあ、行くぞ」

それは城での夜のことだった。

「あ、そうだ今度タイミング見つけて俺とルチアを二人つきりにしてくんない？」

クラウスはレイの突然の申し出に疑いの目を向けた。

「どういうつもりだ？」

レイはへらつと笑って分厚いノートを取り出して目の前でひらひらと振った。

「実はさ、俺ルチアの監視の任務もあつてついてきたんだよねー」

クラウスににらまれてレイは肩をすくめる。

「じょーだんだつて。ま、任務を受けてたのは事実だけど、俺はあいつをじじいどもの実験台にするつもりはないさ」

そこでレイは真剣な表情をして、続ける。

「たださ…、ちょっと心配なんだ。どこまで感情が失われてるのかとか…。シリウスのこと何か聞き出せるかもしれないし」

「そう…だな。なんだか、もどかしいものだな…」

レイは首をかしげる。

「？」

「世界と人一人の命を天秤にかけるものではないが…。あの子に滅ぶ道をわかつて護衛をしているのがな…。そう思わないか？」

「確かに。なんとかしてやれないのかな」

「レイ？大丈夫？」

ルチアに話しかけられてレイははつと我に帰った。

「ん、ああ…。なあ、この先にでかい噴水がある、広場があるんだ。そこに行ってみないか？」

「うん。ねえ、レイはこの領主さまとはどういう関係？」

レイはうんと頭をかいだ。

「ものすごく……遠い親戚？」

「ふうん。ねえ、なんか話があるから二人つきりになったの？」

いきなり核心をついたルチアの質問にレイは肩をすくめ、噴水のそばにあるベンチを示した。

「あいかわらず、勘がいいねえ。とりあえず、すわろーぜ」

広場には子供たちの遊ぶ声が響いている。

「レイは……私が最終的にはどんな風になっちゃうかしってるんだよね？」

「……まあな。協会のジジイどもからきかされてたし。この際行っちゃうけど、俺はお前の監視を命ぜられてついてきたんだ。もちろん、俺にはそんなつもりはないけど」

ルチアにじつと見詰められた、レイはふいつと目をそらす。

「そうなんだ……。私ね最近、ふつと感情がなくなるの。楽しいって悲しいって何？みたいないな」

レイは静かにルチアの言葉を聞いている。

「笑い方がわかんないの……。人じゃなくなるのがすごい怖い。日に日に恐怖だけが募っていくの……。でもね……」

「でも？」

「世界が平和になるんだったら……。みんなのためになるんだったらって思うと耐えられるんだ」

ルチアは小さな微笑みを浮かべる、レイは唇をかんだ。

「そ……うか。なあ、シリウスは一体何者なんだ？」

ルチアははつと目を見張る。

「それは……。言えない、言えないよ」

急にあわてるルチアにレイはとまどう。

「口止めされてるとか？」

「違う……。言えないようになってるの」

レイはルチアを抱き寄せる。ルチアは突然のレイの行動に驚きを隠せない。

「レ…イ？」

レイは抱きしめる腕に力をいれて、ルチアの肩に顔をうずめる。

「アイルはもちろん、俺だってクラウドだってお前の力になりたいんだ。だから、気にしないでなんでも言えよ？」

ルチアはきゅっとレイの服をつかむ。

「全部全部受け止めてやるから…」

「レイ…、ありがとう」



「レイ……」

ルチアはレイの袖をきゅっと掴んで、目を閉じる。

「レイ、あったかい……。こういう感覚もいつか消えていつっちゃうのかな？」

レイは返事をせずにもっと力をこめて抱きしめる。

どこかに行ってしまわないように……

「怖いよ……」

「そんなことには絶対させない……。世界もお前も両方救える道を絶対見つけてやるから」

レイは一度ルチアの体を離して、ルチアの瞳をじっと見つめる。

「だから、そんな悲しいこと言うなよ」

ルチアはレイの頬に触れて、クスツとほほ笑んだ。

「泣いてくれるの？レイは優しいね」

「ルチア……」

しばらく二人は何をするわけでも、話すわけでもなくただベンチに座っていた。

噴水の水しぶきに太陽の日差しがあたって、宝石のように輝いている

「さっきは格好悪いところ見せちゃったな……」

バツが悪そうにレイが沈黙を破った。

「ううん、格好悪くないよ？だって、私のために流してくれた涙だもの」

ルチアはほほ笑んだ、その笑顔がレイにはとても痛々しく見える。

「笑い方……」

「え？」

「笑い方わからなくなっちゃったんだろ？無理して笑わなくてもいいぞ？」

そう言って心配そうに顔を覗き込んだ、大丈夫だよとルチアは言う。

「大丈夫だよ。無理してなんかないよ?」

「そうか…。なら、いいけどな」

そこへカタリナ夫人がやってきた。

「どうしました? ココナ嬢ならここにはいませんよ?」

「いえ、私が見があるのはココナではないのよ。私が見があるのはあなたよ」

そう言つてカタリナはルチアの方へ向き直る。

「なぜ、私に…?」

「あなたのフルネームを教えてちょうだい」

ルチアはレイと顔を見合せて首をかしげた。

「私の名前は…」

ルチアが言いかけた時、ココナの声がした。

「お母様! ? 私を探しに来たの?」

「ええ、それもありますけど…。ココナちゃんと勉強しなくては、立派な巫女様にはなれませんよ?」

アイルは怪訝そうにつぶやいた。

「巫女様…? とはどういうことですか?」

「信託では私の母は世界を救済する巫女を産むのだといわれていたんです。ですから、私は巫女になるべき人間なんです」

そうか…、ここは巫女が旅にでたという情報が入ってないんだな。

あれ…まさか…

4人は顔を見合わせる。

「どうかしましたか? …あ、そう言えば私まだ皆様のお名前を聞いていませんでしたね」

「それは失礼いたしました。んじゃあ、ルチアからどうぞ」

レイに促されルチアは口を開く。

「ルチア・フォン・エルウッドです」

その瞬間明らかにカタリナの顔色が変わった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8520c/>

---

Full Moon

2010年10月28日08時15分発行